

## F+f + の文学問題

本書は、小説家としてデビューする以前の若き漱石が、英国留学からの帰国後、東京帝国大学で行なった講義をもとにした未完の大著『文学論』を、あらためて読み解き、そこに込められたさまざまな可能性を徹底的に引き出そうとする、野心的な長編論考である。著者の山本貴光は、その博覧強記を駆使して、漱石が『文学論』で、いったい何を探り当てようとしたのかを鮮やかに炙(あぶ)り出し、現在「文学」を書いたり読んだりしようとしている者たちに使用/応用可能にしようと試みる。『文学論』の出版は一九〇七年、そう、これは実に百十年も昔の「文学論」の再生プロジェクトなのである。

『文学論』における漱石の主張は、本書の題名にも含まれている以下の式に端的に示されている。「F+f」。「F」は「認識」、「f」は「情緒」である。すなわち「認識+情緒」。漱石はこれこそが「文学」の正体であると喝破した。このことからわかるように『文学論』の大きな特徴は、曖昧模糊(もこ)とした「文学」なるものを、数学のような公理系として捉えようとした点にある。そうすることによって漱石は「文学」を個人の才能や趣味性から切り離し、普遍的で一般的な「学」へと昇華させようとした。

これは蛮勇と呼んでもいい挑戦的な取り組みだったが、山本も漱石に倣って、いわば「一般文学学」を立ち上げようとしている。『文学論』を「現代語訳」し、今日的観点から解説を施す第一部、『ギルガメシュ叙事詩』から円城塔に至る古今東西の十作品に「F+f」を適用してみせる実践編の第二部、『文学論』以外/以降の「文学論」を扱った第三部。附録(ふろく)として年表やブックガイドも付いている。大変な労作である。

### 《山本貴光さんの『文学問題(F+f+)』創作ノート

#### 文学とは感情のハッキングである

一つの譬え話をしてみよう。

文学とは、言語によって作られるアプリケーション・ソフトウェアのようなものだ。

私たちは、作品を読むとき、自分と言うハードウェアに文学作品と言うアプリケーション・ソフトを読み込ませる。

脳裏にはこれまでの経験で作られた記憶があり、これがいわば基本ソフトウェア(OS)として、読み込まれたアプリケーション・ソフトを解釈する。

その結果、ハードの状態が変化する。

この譬えに乗って、もう少し考えを進めてみよう。

作者は、言葉を並べて文をなし、文章を並べて一篇の文学作品となす。

そこで使われる言葉は、ほとんどの場合、作家が全てを一から作り出したものではない

既存の言語の文法と語彙と表現のうち、その作家が過去の経験を通じて遭遇し、脳裏に収められたものをリソース、材料としてそれを組み合わせることで作品が作られる。

私たちが現在知っている本があれば、作家が組み合わせた文字を、編集者とデザイナーが整え、タイポグラフィーや姿かたちをデザイン(設計)し、別途製造されたなんらかの物質(紙、インク、電子装置など)を使ってある形に仕立てる。

こうした場合、ともするとデザインの影響は忘れられがちだが、例えば書店や自分の書棚にある本を読むときのことを思えば、それが、到底無視し得ないとわかる。

私たちは本を読むとき、それに先立って背表紙や表紙を見ている。

その色や形を覚える。

本を読むに先立って本を手に取り触れている。

ページをくぐれば、デザイナーが考えたフォーマットに従って配置された文字を目にし、その配置とともに書かれていたことを記憶する。

辞書を典型として、「確か右上のほうに書いてあった」などと覚えているのはその例である。

もしある本について思い出す時、表紙の様子や大きさが思い出されたとしたら、あなたはその本をそうしたデザインとともに記憶している。

と言うよりも、おそらくはデザインのおかげで記憶されている。

しかも、他に無数にある本やその他のものと区別している。

もう一歩進めて、デザインこそが記憶を作っていると申し上げたい。

読者は、そのようにある形で象られた物質――多くの場合、束ねられた紙やデジタル装置――を手取る。そこに並べられた言葉を(ときに飛ばしたり戻ったりしながら)順番に目から身体に入れて、そうとは自覚しないものの脳で処理して、その結果、心身の状態が変化する。

つまり目にした文字によって何らかの記憶が想起され、心の中で(意識の上で、あるいは無意識のうちに)ある場面や状況が思い描かれる。

思考や認識や感情や意欲といった心の状態がさまざまに変化する。

場合によってはその結果、脈拍が早まり、手に汗を握り、空腹を覚え、怖気に震えると言う具合に身体にも変化が生じる。

以下同様して、目は文字を追い、今述べた一連の出来事が連なって、心身の状態が変化していく。

つまり私たちは、人間と言うハード(身体)と基本ソフト(OS/蓄積された記憶)に文学作品と言うアプリケーション・ソフト(設計された文字列)を読み込ませて、状態を変化させて楽しんでいるわけだ。

作者の立場から言えばこれは読者と言うハードと OS に向けて、ある文字列を一定の順序で送り込んで、そのハードの状態を変化させると言うことに他ならない。見ようによっては、読者と言うハードと OS を、自分が書いたプログラム(文学作品)でハッキングしているようなものだ。

つまり、自分が並べた文字列によって、読者が自分では思ってもみなかった状態をその心身に生じさせるわけである。

読者はそれぞれ人間と言う生物に共通した仕組みを持っているとともに、それぞれが異なる基本ソフト(記憶)を備えている。

それだけに、作家によるハッキングは、常に狙った通りの効果を発揮するとは限らない

むしろ、作者自身も思ってもみなかったような事態が作家の与えも知らぬところで生じているのではないか。

ここで再び、疑問が浮かんでくる。

今述べられたことは、文学に限って言えることではない。

文字で作られたものなら、なんであれ同じように言えるのではないか。

例えば、家電製品の説明書や日々のニュースやエッセイ、専門書や論文を読むときにだって、同様のことが生じているのではないか。

右に書かれた文章の「文学」と言う文字を「文章」や「言語」に置き換えてみても成り立つのではないかと。

では文学と呼ばれる言葉の塊と、それ以外の言葉の塊とは、一体どこがどう違うのか。

漱石の考えを借りれば、文学とは読者の感情(情緒)をハッキングして幻惑する装置である。これをつまらないことだと思うが、とてつもないことだと思うか。かつてそれは存外馬鹿にならないことだと考えられていたために、文学は時として、検閲や発行禁止や焚書の憂き目にもあってきたのだ(影響がないなら単にほっとけば良い)。皮肉なことに、文学の効果と威力に敏感なのは、それを敵視する者たちだったわけである。

興味を持って読めて、読む者の感情を揺さぶり、あるアイディア——時として為政者にとっては危険な発想や知識を記憶に刻むこと(国によっては今もなおインターネットの使用が検閲・制限されている現状も連想しておこう)人は脳裏に収めた記憶によって、世界の見方を変え、状況に意味を重ね、判断を下す。

文学作品を無害で無益な娯楽のようなものだと思うか、革命の引き金となりかねない危険な代物だとみるか。

——とは、いささか強調が過ぎるかもしれない。

だが、文学における感情のハッキングが読者である私たちに影響与えている可能性について、一度は考えてみても良い。

ここで比喻を離れて話を戻そう。私たちは文学作品を読むとき、何をしている事になるのか。

一体何を経験しているのか。

その経験は私たちに何をもたらしているのか。

これこそは、私たちが漱石の文学論から受け取るもう一つの大きな問いである。

漱石が「幻惑」と名付けた現象、読書と言う経験の内実は今もって謎のまま。今のところ、ある作品を読んで、自分の身に起きたことを、めいめいが言葉で自分の外に出し、互いに見せ合い語り合うほかに、私たちはこの現象と経験を分かち合う方法を持っていない。

きたるべき「文学論」のひとつの方向は、文学作品を含む読者の経験をいっそうよく理解ことにかかっている。

そこでは文学で書かれた内容のみならず、その文字を知覚できる形にする物質やそのデザイン、あるいはそれが読まれる環境や心身も無関係ではありえない。

では、こうした営みとその現象を、どのようにしたら私たちはより適切に捉えて理解できるだろうか。

例えば、デジタル環境が発達・普及してきたおかげで、かえってそれまで無自覚のままに置かれてきた本の意味と価値の見直しと検討も進んできた。同じ作品(文字列)なら、本で読んでも電子環境で読んでも同じである。

そうした初期の粗雑な議論を超えて、単なる道具の性質の話ではなく、それを使う人間の性質、あるいは人間と動物の組み合わせから生ずる出来事に関わると言う観点での研究・検討も進みつつある。

こうした諸要素を含めて、文学を読むと言う営みが、人に何をもたらすのかを検討することで、かえって文学とは何か、と言う問への答えが見えてくるはずである。

ことは文学と言う既存の制度の中だけにとどまらず、人間や社会や環境とも大いに関わっている。

これについては今後とも機会をとらえて検討しているつもりだが、本書が、そうした文学をめぐる問題を考える一助になれば嬉しい。と

(著書 あとがき)、より

「F+f」。文学は、この三つの文字で表せる——。文筆家・ゲーム作家の山本貴光さん(47)の著書『文学問題(F+f)+』(幻戯書房)は、100年ほど前、夏目漱石が展開した文学理論の可能性を、古今東西の文学を渉獵しながら考えさせる野心作だ。「文学は役に立たない」と言われがちな昨今だが、漱石の理論を通し、文学の強い力が見えてくる。

〈凡(およ)そ文学的内容の形式は(F+f)なることを要す〉

約2年の英国留学を終えて帰国した漱石は1907年、東京帝国大学での講義などをもとに『文学論』を発表。「F+f」は、この著書の第一編冒頭に登場する。

〈Fは焦点的印象又(また)は観念を意味し、fはこれに附着(ふちやく)する情緒を意味す〉

つまり「『人間の認識=F』と『感情=f』の二つが文学の要素だと考えた」と山本さんは説明する。

例えば、星や花は文学の題材になる。一方で、数式で構成された科学の論文は文学ではない。認識のみが書かれていて、誰かが「○○と思う」といった部分がないからだ。

「文章は人の心を動かし、幻感し、没入させる。文学とは何かを考えるには作品の形式ではなく、それを読む人間の意識に注目しなければならない。漱石の見立ては画期的だった」と評する。

そんな理論を、トロイア戦争末期を描いたホメロス『イリアス』や紫式部『源氏物語』などの名作を引用しながら解説してみせる。

ただ、『文学論』は未完で終わった。漱石自身が失敗作と評していたこともあり、「一般論にすぎる」などと批判にもさらされてきた。それでも山本さんが注目するのは、漱石が理論を求めた「文脈」が、彼の創作活動の意味を捉え直す手がかりになるからだ。

日本の近代化がスタートしたばかりの明治期を生きた漱石。漢籍や日本の古典文学には親しんでいたものの、自身の専門の英文学は「舶来のもの」だった。

「英語で書かれた文章をネイティブスピーカーと同様に味わうことはできないが、一方で確かな魅力を感じる。このことが、言葉や文化の違いを超える文学の普遍性への関心をかき立てた」

漱石が小説を書いたのはおよそ10年間。最初の長編小説で一般的な意味での筋がない『吾輩は猫である』、写実文学の金字塔『草枕』など、漱石は様々なタイプの文学を世に問うた。「彼は小説を、人の意識に働きかける仕組みと捉えた。その創作活動は、多様な仕組みを生み出す実験だった」とみる。

文学の意味を拡張しようとしたと解釈できる漱石の試みは、現代社会においても示唆に富むという。

「人間の意識に働きかける言説を文学と位置づければ、文学は映画、演劇、ゲームなどあらゆるところに存在することに気づく」

文学が「売れなくなった」と言われても、私たちは映画やゲームなどを通じて、遍在する「文学」に触れているというのだ。

「時にプロパガンダとして使われ得るほど、怪しくも力強いのが文学という装置。言葉をめぐる環境が大きく変わる今、『F+f』の射程を、漱石がやったようにどう自己本位に拡張できるかが問われている」

文学問題「F+f」+

<https://blogs.yahoo.co.jp/yhjp711/57945950.html>

漱石全集第14巻 「文学論」

<https://blogs.yahoo.co.jp/yhjp711/57924393.html>

漱石が英国留学生活の大半を捧げ、のちに大学の講義録として形になった本書は、文学を「F+f」(認識的要素+情緒的要素)の定式で解剖した先駆的な文学理論書であると同時に、優れた文章読本、詞華集、創作論、レトリック論、笑い論、人生訓、歴史哲学書でもある。夏目先生が東西の文学を架橋しながら教える「文学とは何か」。